

## 鼻音声母の非鼻音化から見る唐代長安音と閩南方言 の関係

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 由来香 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00026417">https://doi.org/10.14945/00026417</a>

# 鼻音声母の非鼻音化から見る 唐代長安音と閩南方言の関係

佐藤 由来香

キーワード：中古音、閩南方言、非鼻音化、唐代長安音、漢音

## 0. はじめに

これまでの数多くの先行研究により、唐代長安音では鼻音声母の非鼻音化という現象が起きたことが判明している。この「鼻音声母の非鼻音化」という現象に着目すると、似たような現象が日本漢音と閩南方言にも存在することが確認されており、このうち唐代長安音と日本漢音の関係については多くの先行研究の結果「日本漢音で鼻音声母字を濁音に写すのは、唐代長安音の非鼻音化を反映したものである」との見解が今日の学界の共通認識となっている（詳しい内容は「1.2.2 日本漢音の非鼻音化」で後述する）。しかし唐代長安語と日本漢字音の比較や閩南方言単体についての研究は一定数存在する一方、唐代長安音と閩南方言の関係を論じた研究はまだ少ない。

そこで本稿ではまず唐代長安音、日本漢音、閩南方言それぞれの鼻音声母の非鼻音化の特徴を確認する。そして非鼻音化が起きた時期やメカニズムを比較し、上に述べた地域以外の中国各地の方言音とも比較する。そして閩南方言の非鼻音化現象に焦点を絞り、非鼻音化が唐代長安音の音韻変化を反映したものなのかどうか、両者の関係性を明らかにすることを目的とする。

なお本稿は中国音韻学に関わる内容であるため、いくつかの前提知識が必要となる。そのため本題に入る前に、まずは以下の 0.1, 0.2 で本稿を理解するために必要な中国音韻学の基礎的な説明をする。

### 0.1 鼻音声母の非鼻音化

中国の音韻学では古来より、音節を大まかに声母（最初の子音）＋韻母（あとの母音を含む部分）の二つに分けて考える。藤堂（1985：16）によると、こ

のうち韻母はさらに介音＋主母音＋韻尾に分けられる。記号で表すと I (声母 *initial*) + M (介音 *medial*) + V (主母音 *vowel*) + F (韻尾 *final*) となり、全体にそれぞれ声調 T (*tone*) がつく。よって中国語の音節 S (*syllable*) は

$$S=IMVF/T$$

という式で示すことができる。つまり本稿でテーマにしている鼻音声母字とは、最初の子音である声母が鼻音である字を指す。

また中国音韻学では各声母のことを「母」と称するが、これは中国音韻学における「三十六字母」という考えに基づいたものである。それぞれの声母を表すためにその声母で始まる字の中から代表して一つの漢字を選び、例えば子音が [m-] の字は「明」の字を代表として明母と呼ぶ。本稿では主に鼻音声母である明母 [m-]、泥母 [n-]、疑母 [ŋ-]、日母 [ɲ-]<sup>1</sup> の字を扱う。

よって鼻音声母の非鼻音化とは、本来鼻音であった声母がなんらかの要因によって非鼻音化する現象 (*denasalization*) を指す。

## 0.2 中国語の時代区分

中国語音韻論においては時代ごとの音韻体系の特徴に基づいて、いくつかの時代区分に分けられる。藤堂 (1985) による各時代区分とそれぞれの時代の主な音韻資料、音韻体系上の特徴を、以下の表 1 にまとめる。

表 1 中国語の時代区分

時代区分	年代	主な音韻資料	主な音韻体系上の特徴
上古 (周・秦・漢)	前 7~後 3 世紀	『詩経』『楚辞』	清濁の区別がある
中古 (隋・唐)	6~10 世紀	『切韻』『広韻』	清濁の混同が始まる
中世 (宋・元・明)	11~14 世紀	『中原音韻』『西儒耳目資』	清濁の混同, 入声消滅
近世 (明末・清)	15~19 世紀	『重訂司馬温公等韻図経』	全濁音の消滅, そり舌音の発達

<sup>1</sup> ɲ は歯茎硬口蓋鼻音。この音声記号は国際音声記号 (IPA) には含まれていないが中国語学ではよく用いられ文献にも頻繁に登場するため、今回はこの記号を使用する。なお IPA にある記号で表すと ɲ である。

以上のように中国語の歴史的音韻論においては、主に上古・中古・中世・近世4つの時代に分けられる。

## 1. 先行研究

まず本論に入る前に、唐代長安音、日本漢音、閩南方言音とは何かをここで一度確認しておきたい。その上で、それぞれの漢字音の非鼻音化現象についてなされた先行研究の内容を整理、比較してから本論に進むことにする。なお、これ以降に出てくる外国語文献の翻訳は、全て筆者によるものである。

### 1.1 唐代長安音

#### 1.1.1 唐代長安音とは

唐代長安音とは、その名の通り7世紀～10世紀頃に当時の都長安を中心とする中国西北地域で話されていた方言の一種である。沼本（1986）は慧琳の『一切経音義』（788～810）に「茂盛…上莫侯反吳楚音也韻英音為摸布反」<sup>2</sup>と記載されている点から、以下のように述べている。

この様な記事によって、次の様な当時の中国音の実態と中国人自身の認識をうかがう事が出来る。唐代中葉（八〇〇年前後）には、長安の言語音の大きな音韻変化の結果、江外（揚子江外の意、江南と同義）の言語音との間に顕著な方言的対立が生じていた。当時の長安人（中央人）は、この長安音を秦音（秦は長安を含む地方の古名）と称し、江外音を吳音（吳楚之音とも、吳は江南地方の古名）と呼称した。

（沼本 1986 : 105）

つまり当時の長安人は既に長安とその他の地域との言語的特徴の差を認識していたということであり、これから述べる唐代長安語の特徴は、他の北方音とは異なる長安独自の音韻変化だった可能性が高いと言える。

#### 1.1.2 唐代長安音の非鼻音化

7世紀以降唐代長安（現在の西安周辺）では、鼻音声母の非鼻音化現象が起こったとされている。当時の直接的な音韻的資料は現時点では発見できていな

---

<sup>2</sup> 沼本（1986 : 108）より、莫侯反 [məu], 摸布反 [mbo]。

いものの、中国語以外の外国語資料から、鼻音声母の非鼻音化が起きたと推定できる。

具体的な外国語資料としては、敦煌から発掘された『千字文』『大乘中宗見解』『阿弥陀経』『金剛経』（いずれも8世紀～11世紀に成立）といった資料が挙げられる。これらの資料について羅（2011）はいくつかの共通点を見出している。その中の一つに「漢音の明母 [m-] の字が一般的に 'b と記され、泥母 [n-] の字は 'd と記されるが、鼻音韻尾を持つ字の声母は m や n のままである（ 'b や 'd はそれぞれ mb や nd の音を表す）」というものがある。例として『唐五代西北方音』より引用して、敦煌資料の泥母字の音注を以下の表2に示す。

表2 泥母字のチベット音注

	千字文	大乘中宗見解	阿弥陀経	金剛経
納	'dab	'dab		
泥		'de		
暖		'dwan		
乃		'nei		'ne'i
難		'nan	'dan	
能		nin	'nen 'nin	'din
耨			nog	'dog nog

（羅 2011 : 43）

表2より羅氏の指摘通り、中古音では [n-] であるはずの泥母字がチベット語の音注では 'd で数多く表記され、また鼻音韻尾を持つ字に関しては一部の例外を除いて、子音は 'd ではなく n で表記されていることが分かる。なお上記の法則に当てはまらない一部の字、例えば「乃 'nei」「耨 nog」は鼻音韻尾を持たない字であるにも関わらず非鼻音化していない。逆に「暖 'dwan」「難 'dan」「能 'din」については、鼻音韻尾を持つ字であるにも関わらず非鼻音化している。よって羅氏の述べる上記の法則は、必ずしも全ての字に当てはまるという訳ではないようである。

また蔣・館野・坂上（2008）が『唐五代西北方音』に基づいて、上で例に挙げた泥母字以外の鼻音声母字についても蔵漢対音資料におけるチベット語との

対応関係をまとめたものが表3である。表3より明母と泥母に関しては鼻音韻尾がない字は非鼻音化し、鼻音韻尾がある字は鼻音を保っているが、その他の字母については鼻音韻尾の有無を問わず非鼻音化が起きているのが分かる。

表3 蔵漢対音資料における鼻音声母の用法

チベット語	漢字								字母
	千字文		大乘中宗見解		阿弥陀経		金剛経		
	無	有	無	有	無	有	無	有	
'b-	○	○	○	×	○	×	○	×	明 [m-]
	○	○	○	○	—	○	○	○	微 [m̥-]
m-	×	○	×	○	×	○	×	○	明 [m-]
'd-	○	×	○	○	○	○	○	○	泥 [n-]
n-	×	○	×	○	×	○	×	○	泥 [n-]
'z-	○	—	○	○	○	○	○	○	日 [ɲ-]
'j-	—	—	—	—	○	—	○	—	娘 [ŋ-]

「無」は鼻音韻尾がない、「有」は鼻音韻尾がある、「—」は対訳例が存在しないことを示す

(蔣・館野・坂上 2008 : 50)

また清濁に関する共通点として、羅氏はもう一つの共通点を挙げている。それは「濁摩擦音である禅母 [ʒ-]・邪母 [z-]・匣母 [ɦ-] などの字は、一般的に [f-]・[s-]・[h-] のように清音の文字で注記され、特に『大乘中宗見解』では全濁音 [b-]・[d-]・[g-] などが p・t・k といいた文字で記されている」というものである。

藤堂 (1985) は、この「濁音の清音化」と非鼻音化を複合的な現象として捉えている。両者の関係性について説明している部分を以下に引用する。

唐都長安では、濁音が清音化したため、b・d・g が音系の中の空き間となりました。そこで従来の全濁音が鼻音に近づき、m→mb, n→nd, ŋ→ng の変化をおこして、この空き間を埋めることとなったのです。

(藤堂 1985 : 224)

つまり、唐代長安音の非鼻音化は、濁音の清音化に伴った現象であったと述

べているのである。先に濁音の清音化があり、その後に音系の空き間を埋めるべく、鼻音が弱化して非鼻音化したというのが、唐代長安音における非鼻音化の仕組みである。以上の説をまとめると、唐代長安音の鼻音声母字は

明母	m	→	mb	→	b
泥母	n	→	nd	→	d
疑母	ŋ	→	ŋg	→	g
日母	ɲ	→	ɲʒ	→	ʒ

といった過程を経て鼻音が弱化し、非鼻音化していった可能性が高いといえる。

さて、これまで述べてきたような唐代長安における非鼻音化現象は、はたしていつ頃起こったのだろうか。水谷（1957）は7世紀に入唐した僧が使用していた読経資料の漢字を調査し、その結果、

「隋末唐初（七世紀初頭）すでに洛陽にまで広がった現象であるから、長安においてはそれ以前に発生したものであろう」と推測出来るのである。

（水谷 1957 : 5）

と述べている。よって唐代長安の非鼻音化現象発生の時期に関しては「7世紀初頭もしくはそれより少し前」という説がかなり濃厚である。

## 1.2 日本漢音

### 1.2.1 日本漢音とは

日本漢字音には複数の読み方が存在するが、それは異なる時代に中国から入ってきた異なる読み方をそのまま維持しているからである。そして日本漢字音は中国からもたらされた時代や音韻の特徴から、大まかに「呉音」「漢音」「唐宋音」の3種類に分けられる。沼本（1986）、藤堂（1985）を参考に、それぞれの漢字音の元になった中国語音の時代や漢字例を以下の表4にまとめる。

表 4 日本漢字音の種類

	時代	母胎音	漢字の例
呉音	5~6 世紀	南朝の江南音	行 ギョウ (行列) 米 マイ (古米)
漢音	7~10 世紀	唐代の長安音	行 コウ (行進) 米 ベイ (米穀)
唐宋音	13 世紀	南宋~元の江南音	行 アン (行脚)

呉音は 5~6 世紀の中国南朝の宋の時代の江南音を伝えたものだという説が有力であるが、未だ立証されていない。しかし『切韻』(601)の体系と比較するとそれよりやや前の状態を反映しているため、5~6 世紀という年代が導かれている。音韻的な特徴として、「行列」の「行 ギョウ」のように濁音が存在する点が挙げられる。現在の普通話には、例えば無気無声音 [p] と有気無声音 [pʰ] の区別は存在するものの、無声音 [p] に対応する有声音 [b] は存在しない。ところが「行 ギョウ」は濁音(有声音)である。このことから当時の中国語には無声音と有声音の区別が存在していたと推測することができ、呉音も清濁の区別という形でそれを反映している。また他の音韻的な特徴として、鼻音の明母字はマ行、泥母字と日母字はナ行に音訳している。

漢音は 7~10 世紀に主に遣唐使によって唐代長安から輸入されてきた音である。詳しくは後述するが、こちらは呉音とは異なり、唐代長安音との関連性をはっきりしている。濁音の清音化現象が起きた長安語を反映しているため、漢音では「行進」の「行 コウ」のように、濁音ではなく清音で音訳されている。また、鼻音の明母字はバ行、泥母字はダ行、日母字はザ行と、やはり長安語の非鼻音化を反映した音訳となっている。なお疑母字は呉音漢音共にガ行で音訳されているが、これは [ŋ-] と [g-] を書き分ける手段が日本語に存在しなかったためだと考えられる。

唐宋音は、13 世紀頃の南宋末~元初における浙江地方の方言音を母胎としている。これらは主に禅僧の往来によってもたらされたため、限られた場面でのみ使用されない。

本稿で重要なのは、唐代長安語を反映しているとされる漢音である。これから具体的に唐代長安音と日本漢音の関係についての研究を見ていくこととする。



### 1.2.2 日本漢音の非鼻音化

さてここでもう一度、鼻音声母字における呉音と漢音を比較してみる。いくつかの例を表5に示した。なお、子音部分の発音を [ ] 内に筆者が付け加えた。

表5 鼻音声母字の呉音と漢音の読み方

	呉音	漢音
米	マイ (古米) [m]	ベイ (米穀) [b]
男	ナム (次男) [n]	ダン (男性) [d]
人	ニン (人間) [n]	ジン (人望) [dʒ]

(藤堂 1985 : 224, 228)

表5より、呉音ではマ行、ナ行で音訳されているのに対して、漢音ではバ行、ダ行、ザ行音訳されていることから、鼻音声母字が呉音（鼻音）から漢音（非鼻音）に非鼻音化したことが分かる。このような日本漢音の特徴について、有坂（1940）は、漢音資料である『蒙求』（正倉院御蔵旧鈔本）を用いて、中古鼻音声母字が漢音ではどのように写されているかについて研究、考察している。その結果、明母の以下の字

沫 邈 模 枚 米 買 密 蜜 冕 毛 苗 廟 妙 馬 母 墨 嘿

これらはいずれも、冕（ヘン）の1字を除いて、沫（ボク）や米（ベイ）のようにバ行となり、かつ中古音では鼻音韻尾を持たない。それに対して以下の字、

門 孟 命 明 鳴 萌

これらは門（モン）、孟（モウ）のように全てマ行となり、かつ中古音では鼻音韻尾をもつことを発見した。同じような現象は泥母字でも見られるとして「鼻音声母は鼻音韻尾がない場合は非鼻音化し、鼻音韻尾がある場合は鼻音のまま」というこの現象を、有坂（1940 : 373）は「頭音交替の法則」と呼んでいる。そして有坂氏はこうした現象について、敦煌資料を用いて唐代長安音について研

究した羅（2011）を踏まえて、以下のように結論付けている。

我々は、ここに、羅常培氏が吐蕃の音譯例について発見した特色と殆ど完全に一致するものを、我が漢音に於て発見し得たのである。これ必ず唐代の西北支那音に實在した特色を傳へてゐるものに相違無い。

（有坂 1940 : 371）

つまり、先に唐代長安音の特徴として羅氏が発見した「漢音の明母 [m-] の字が一般的に 'b と記され、泥母 [n-] の字は 'd と記されるが、鼻音韻尾を持つ字の声母は m や n のままである」という特徴と同様の現象が、日本漢音にも見られることが有坂氏によって示されたのである。当時の日本が遣唐使を当時の都長安に派遣していたという歴史的事実を合わせて考えると、日本漢音は唐代長安音を反映していると言える。日本漢音が唐代長安音を反映しているならば、日本漢音から唐代長安音を推測することも可能となる。

### 1.3 閩南方言

#### 1.3.1 閩南方言とは

中国にはいくつかの方言グループが存在するが、その中の一つに閩方言<sup>びん</sup>というグループがある。閩は中国南部に位置する福建省の略称で、閩方言が話される地域は福建及び南部沿岸地域や台湾、東南アジアの一部にまで及んでいる。話者はおよそ 3,895 万人で、漢族全体の約 4.1%<sup>3</sup>を占める。

また閩語全体は一般的に、福州方言を典型とする北方グループと（閩北語）と、厦門方言を代表とする南方グループ（閩南語）に分けられている。今回は非鼻音化に焦点を当てているため、本稿では非鼻音化現象が見られる閩南語を取り扱う。以下の表 6 に閩南方言声母の音素と音価をまとめて示した。

---

<sup>3</sup> 漢族全体の人口を 9 億 5 千万人とした上での数字。（S.R.ラムゼイ 1990 : 115）

表 6 閩南方言声母一覧

			唇音	舌尖音	舌面音	舌根音	喉音	
ハ レ ツ 音	無 声	無 気	p[p]		t[t]		k[k]	[ʔ]
		有 気	p'[p']		t'[t']		k'[k']	
	有 声	無 気	b[b]				g[g]	
ハ サ ツ 音	無 声	無 気		c[ts]		c[tɕ]		
		有 気		c'[ts']		c'[tɕ']		
	有 声	無 気		(z[dz])		(z[dz])		
鼻 音	有 声		m[m]		n[n]		ŋ[ŋ]	
側 面 音					l[l]			
マ サ ツ 音	無 声			s[s]		s[c]		h[h]

(王 1987 : 68)

また閩方言は地域ごとに声母や韻母の数が異なる、声調が6~7調あり更に連続変調する等、中国各地の方言の中でも発音体系が最も複雑な方言と言われている。中でも上古音の特徴をそのまま受け継いでいるのが特徴で、閩音の具体的な成立時期について王（1987 : 8）は「3世紀は閩音系の成立を考える上に、もっとも蓋然性が大きい時期である。」と述べている。

さらに閩方言は文白異読が他の方言に比べてずば抜けて多い方言でもある。文白異読とは、同じ字に文言音（文字の上に伝承された発音）と白話音（話し言葉の語彙の上に伝承された発音）<sup>4</sup>の異なる2種類の発音が存在する現象を指し、一般的に白話音の方が文言音よりも古いとされている。

さて表6より鼻音 [m] や [ŋ] に対して、非鼻音である [b] や [g] が存在しているのが確認できる。閩南方言には鼻音と非鼻音が文読音や白話音それぞれ、複雑に入り混じっているのである。

ここで気になるのは、[n] に対応するのが唐代長安音や日本漢音のように [d] ではなく [l] である点である。では [d] は一体どこへ行ってしまったのか、という疑問が当然出てくるが、王（1987 : 69）によれば大陸では [l] も /d/ と解釈するのが一般的だとされている。今回は中古音との比較に便利のため [l] と

<sup>4</sup> 文白音、白話音ともに王（1987 : 167）の定義に基づく。

表記するが, [l] も音素的には /d/ に含まれて, 閩南方言における [d] と [l] の違いは曖昧なものであるという点をここで押さえておきたい。

### 1.3.2 閩南方言の非鼻音化

ここから, 閩南方言の非鼻音化に関する具体的な先行研究を見ていく。

李 (1992) は閩南地方の以下の4地域の方言を調査し, それぞれの地域でどのように非鼻音化が進んでいるのかを考察している。

以下に, 李氏の考える閩南方言の中古鼻音声母の変化の過程をまとめる。

明母	m	→	b
泥母	n	→	l
疑母	ŋ	→	g
日母	n	→ dz	→ l

さて李 (1992) の説によれば日母の非鼻音化の過程は dz→l となるが, 小松 (1996) は dz と l はそもそも異なる語音層であると指摘している。小松氏は閩南方言の日母字に焦点を絞り, 日母字に含まれる語音層について以下のように考察している。

- ① n→nz : 摩擦音の介入によって, 舌頭鼻音から舌面鼻音となる
- ② nz→r : 鼻音, 舌面の要素が両方失われ, 有声摩擦音だけになる

↓

n → nz → z/r → r

(小松 1996 : 123)

その上で小松氏は, 閩南日母の l/d が上古音の名残であるとするならば, n→nz に変化する間に nd が存在した可能性があると述べている。nd→nz が考えられる根拠として小松氏は『韻鏡』における日母字が齒清音の3等<sup>5</sup>に配置されている点を挙げている。3等に配置されているということは i, u 介音が多い, つまり nd+i, 狭母音 i の介入によって舌頭鼻音破擦音 nd が舌面摩擦音 nz に変化するのは不自然ではないと述べた。同時に nz から鼻音が消失して完全擦音化す

---

<sup>5</sup> 『韻鏡』では韻母の欄を4つに区切り, 上から順に1等, 2等, 3等, 4等と呼ぶ。これは, 韻母を発音する際の口の開きが大きいものから狭いもの順に配置されている。

ることで dz に変化するのもあり得るとしている。

よって結論部分で小松氏は、閩南日母には以下の 2 つの層が存在すると述べている。

①d/l 層……n→nd→d/l

上古音 n が非鼻音化して nd になった後，中古音 nz になる前に中原地方から離れて閩地に入り，後に鼻音が消失して d/l になった。

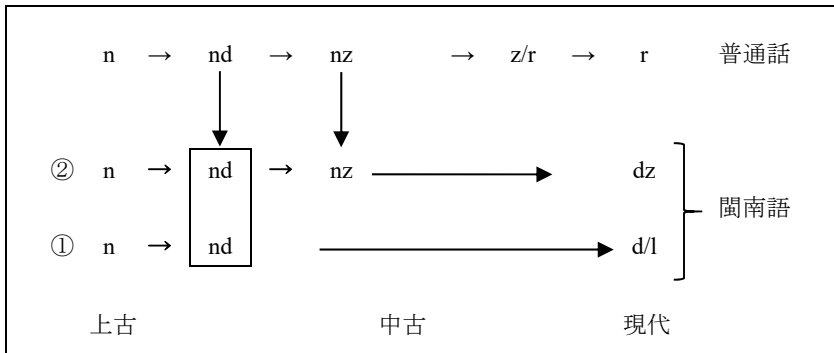
②dz 層……n/nd→nz→dz

nd が中古音 nz に変化した後閩地に入り，中古日母 nz から dz に変化。

(小松 1996 : 122)

つまり分かりやすく図にまとめると，以下のようになるだろう。

図 1 閩南日母の 2 つの言語層



(図は筆者が作成)

よって小松氏の説を信じるならば，先程の李（1992）の「日母：n→dz→l」の説は正しくないということになり，地域によって [l] と [dz] の別が存在するのは，そもそも異なる言語層だからということになる。また日母に限った話ではあるが，上古音で一部非鼻音化が起きていた可能性があることが分かった。

林（1998）は閩南方言における中古次濁声母明，泥，日，疑母のいくつかの常用字に，まれに [h] で発音する声母が存在する問題について言及した上で，閩南方言の非鼻音化現象について考察している。林氏によれば閩南方言の中古

次濁声母には3つの類型、すなわち① [b], [d], [l], [g] ② [m], [n], [ŋ] ③ [h] の3種類が存在するとし、それらのメカニズムについて

读 m、n、ŋ 是由于鼻化韵母的影响，使其保留这些声母原来的音值；读 [b]、[d] (l)、[g] 是 m、n、ŋ 的强化，使其由鼻浊音变为口浊音；读 [h] 是 m、n、ŋ 的弱化，使其由鼻音变为口音里的清擦音。可见发音方法上的演变和分化，也会影响到发音部位的变化。

m, n, ŋ で発音するのは鼻化韻母の影響によって、声母本来の音が保たれているからである。[b], [d] (l), [g] で発音するのは m, n, ŋ が強化して、鼻濁音が口濁音に変化したからである。[h] で発音するのは、m, n, ŋ が弱体化し、鼻音が無声摩擦音に変化したからである。調音方法における変化と分化が、調音点の変化にも影響を及ぼすことが分かる。

(林 1998 : 60)

と述べている。3つの類型について林氏の主張をまとめると以下ようになる。

①の [b], [d] (l), [g] は [m], [n], [ŋ] の鼻音が強化して鼻濁音が口濁音に変化したもの。

②の [m], [n], [ŋ] は鼻化韻の影響で声母本来の鼻音が保たれている。

③ [h] は [m], [n], [ŋ] が弱体化して、鼻音が無声摩擦音に変化したもの。

このうち③に関して林氏は、中古音の一部の中にすでに出現しているとし、『広韻』にある反切異文の例を紹介している。以下に、その例を引用する。(分かりやすくするために、反切をもとに中古音の発音を筆者が付け加えた)

弗：魚 [ŋ] 倚切，又许 [h] 鞞切  
豨：俄 [ŋ] 寒切，又可 [kʰ] 顔切，侯 [ɣ] 吁切  
噐：五 [ŋ] 高切，又许 [h] 娇切  
箇：武 [m] 庚切，又许 [h] 迄切  
膾：武 [m] 夫切，又荒 [h] 乌切

(林 1998 : 61)

また諧声文字は上古音の推定に用いられることがあるが、林氏は鼻音声母字と喉擦音声母字が互いに諧声文字として現れる現象があるとしている。

{	明母：每 無 微 毛 民 勿 墨 亡
{	曉母 <sup>6</sup> ：悔 鄒 微 <sup>7</sup> 耗 昏 忽 黑 荒
{	疑母：訛 午 堯 驗 岌 虐 儀
{	曉母：化 許 曉 險 吸 諺 義
{	泥母：禱
{	曉母：薜

(林 1998 : 61)

以上のことから、鼻音が [h] に変化する現象は、中古音の時代から存在していたと分かる。よって閩南方言に存在する [h] は、中古音の発音が現在まで残っているものと言える。これまでの林氏の説をまとめると以下ようになる。

①鼻音強化による変化	②鼻化韻をもつ字	③鼻音弱化による変化
明母    m    →    b	→声母は鼻音のまま	明母    m    →    h
泥母    n    →    d/l		泥母    n    →    h
疑母    ŋ    →    g		疑母    ŋ    →    h
		日母    n    →    h

以上が閩南方言の非鼻音化現象のみについて考察している先行研究である。次に、「閩南方言の非鼻音化は唐代長安音を反映したものではない」という立場の研究を紹介する。

蔣・館野・坂上(2008)は、唐代長安音と閩南方言の非鼻音化は発生の原理・現象・時期のいずれにおいても一致しないため、閩南方言の非鼻音化は唐代長安音を反映したものではなく独自に変化したものであるという見方を支持している。

まず非鼻音化発生の原理であるが、蔣・館野・坂上氏らは林(1998)の説を根拠としている。唐代長安音の m→mb, n→nd, ŋ→g は鼻音弱化であるのに対

<sup>6</sup> 曉母字の声母の発音は [h]。

<sup>7</sup> 出典の林(1998)には「微」とあるが、この字について上古音や中古音を調べても声母 [h] の発音は見当たらない。恐らく「微」(上古音, 中古音共に [hiwɔi]) の間違いであろうか。

し、閩南方言の  $m \rightarrow b$ ,  $n \rightarrow l$ ,  $\eta \rightarrow g$  は鼻音強化によるものであるため、似たような変化をしているがそれぞれ発生の原理が正反対であるとしている。

次に現象面の違いであるが、ここでは理由が2つ挙げられている。1つ目は林(1998)で述べられていた「閩南方言で一部の鼻音声母が  $h$  になる」現象である。これについて蔣・館野・坂上氏らは、唐代長安音には鼻音声母が  $[h]$  になる例は存在せず、漢音においても原音の鼻音声母をカ行<sup>8</sup>に写す例は報告されていない、と述べている。2つ目は有坂(1940)の「頭音交替の法則」の有無による違いである。先述の通り唐代長安音及び日本漢音には頭音交替の法則が当てはまるが、閩南方言では鼻音韻尾の有無を問わず全て非鼻音化が起きているため、現象面でも唐代長安音とは一致しないと述べている。

最後に時期による違いであるが、蔣・館野・坂上氏らは李(1992)の説を根拠にしている。李氏は閩南方言の非鼻音化の時期について、以下のように述べている。

董昭輝先生指示，日語中許多漢語借字，如：美、質、女、努、疑、義等等，都已去鼻化，而在日語語音演變史上並未有去鼻化的演變，所以應該是本來漢語借入日語時就已去鼻化。因此，董先生認為閩南語這些音的去鼻化也大有可能是固有而非變化的結果。作者卻認為這只是顯示去鼻化的時代相當早，也就是在日語大量借漢語(大約公世第七至第九世紀)之前。

董昭輝氏は、日本語の中には多くの漢語からの借字があり、例えば、美、質、女、努、疑、義などで、これらは全てすでに非鼻音化していて、しかし日本語音韻変化史上においてそれまで非鼻音化の変化は決して起こっていない、よって本来の漢語は日本語に借入された時にはすでに非鼻音化していたはずだと指摘している。そのため、董氏は閩南語のこれらの音の非鼻音化も固有のものであり変化の結果ではない可能性が高いとしている。作者はむしろこの非鼻音化の時代は相当早く、日本語が大量に漢語を借入した(およそ七世紀から九世紀)時期より前だということを示しているに過ぎないと考える。

(李 1992 : 433)

つまり李氏は、日本漢字音が全て非鼻音化しているのは、もともなった中国

---

<sup>8</sup> 中古音曉母  $[h]$  は、日本漢字音ではカ行で写されている。



漢字音が非鼻音化しているからであり、よって日本語が大量に漢語を借入した7世紀～9世紀よりも前に日本漢字音のもとになった閩南語は非鼻音化しているはずだと述べているのである。これを受けて蔣・館野・坂上氏らは以下のように述べている。

7世紀以前だとすれば唐代長安音の鼻音弱化が起きる前にアモイ方言には非鼻音化がすでに存在していたということになる。このことは、非鼻音化の発生の時期においても両者が一致しない可能性が高いことを示している。

(蔣・館野・坂上 2008 : 66)

以上の理由によって蔣・館野・坂上氏らは、閩南方言の非鼻音化と唐代長安音の鼻音弱化との間に関連性は認められない、と結論付けている。

さて次は、閩南方言と唐代長安音の関連性を指摘している研究を紹介する。

王(1987)は台湾音を中心とした閩南方言音について総合的に研究している。特に文言音と白話音の対応関係に重点を置き、文言音と白話音という2つの大きな言語層における各声母、韻母の現れ方について比較、考察している。

まずは王氏がまとめた閩南方言における明母、泥母、疑母、日母の現れ方を、以下の表7に示す。

表7 閩南方言における鼻音声母の現れ方

	明	泥	疑	日
-m, -n, -ŋ	b	l	g	z
-N	m	n	ŋ	n
陰韻 <sup>9</sup>	b	l	g	z, l
	m	n	ŋ	n

(王 1987 : 215)

表7について王氏は、-Nの場合の鼻音は白話音に限られた形であるが、その他の濁音や鼻音に関しては、文言音にも白話音にも出うる形であるとしている。

ここで王氏が目としたのは陰韻の部分である。王氏はこの鼻音と非鼻音が入り混じっている中に、「文言音が鼻音であるのに対し、白話音が濁音」という対

<sup>9</sup> 鼻音韻尾、入声韻尾以外の韻尾を指す。

応を持つ一部の字が存在している点を指摘している。この現象について王氏は以下のように述べている。

日本漢字音については、漢音は唐代の長安方言に起った非鼻音化現象（denasalization）を反映したのに対し、呉音は非鼻音化現象のなかった江東の方言を反映した、と説明されている。この説明は、われわれに参考になる。私は、この場合の白話音は、漢音と同じように長安方言の系統を引いた形である蓋然性が大きいと思う。当然これをもたらしたのは、西北系の開拓民ということになる。

（王 1987 : 217）

つまり、閩南方言の白話音において中古鼻音声母が非鼻音化しているのは、西北系の開拓民によってもたらされた長安方言の影響である可能性が高いと述べているのである。同様の説は藤堂（1985）も言及している。

福建省は遠く東南沿海の地ですが、当地の文人や官僚が都ことばのこのくせを伝えたためでしょうか、いまなお閩語（福建語）の文語音は、鼻音を全濁音として発音しています（武 bu・文 bun など）。日本から長安を訪れた遣唐使たちも、まさに福建からの留学生と同じことを行ったのでした。

（藤堂 1985 : 224）

なお藤堂氏は「閩語（福建語）の文語音は、鼻音を全濁音として発音しています」と述べているが、これまで確認してきた通り、閩南方言においては文言音と白話音それぞれで非鼻音化が確認されているため、この部分の藤堂氏の指摘は正しくない。それはともかく、日本の遣唐使と同じように当時の都長安との文化的交流の結果、閩地でも非鼻音化が起きた可能性について、藤堂氏は言及しているのである。

一方王氏は、文言音の鼻音に関しては、日本呉音とは事情が異なると述べている。

しかし文言音の場合は、呉音と事情が違う。非鼻音化しなかったのは、江東の方言だけではない。現在の諸方言では、北京をはじめ、鼻音で読んでいる方言がむしろ多い。これは、一旦非鼻音化したのがまた鼻音に逆戻りしたと考えるよりは、非鼻音化は実際には長安一帯だけの局地的現象で、大勢としては鼻音の伝統が保持された——江東はその一地域——のによると考える方が合理的であろう。それはともかく、文言音はもっと新しくて、鼻音の伝統を保持した中原の形が借入されたのに違いないのである。

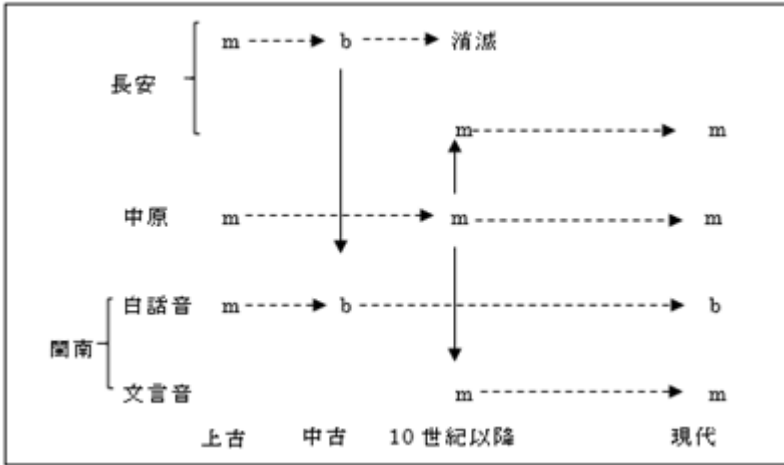
(王 1987 : 217-218)

唐代長安音の音韻変化が長安周辺独自の変化であった可能性が高いことは、唐代長安音の特徴を説明する段階で触れた通りである。つまり逆に言えば長安以外の地域では中古鼻音声母字はずっと鼻音のままであり、閩南方言の文言音の鼻音は、ずっと鼻音を保ってきた中原地域の音が由来である、というのが王氏の見解である。なお、文言音借入の時期について王氏は唐末五代と推定している。

しかし王氏は、「閩南語は非鼻音化が非常に進んだ方言といえるようである。しかしこれは長安方言とは関係なく、閩南語の中での自律的な音韻変化によるものである。」(王 1987 : 218)とも述べている。よって、非鼻音化のきっかけこそ長安音からの影響であっただろうが、それ以降は現在に至るまで閩南語の中で独自に変化、発展を遂げたのだろうという見解が、王氏の最終的な結論のようである。

ここまでの王氏の説を明母を例に図にすると、次のページの図 2 のようになるだろう。

図2 長安音と閩南音の非鼻音化の関係



(図は筆者が作成)

図2の解説をすると、まず唐代長安で非鼻音化が起きて  $m \rightarrow b$  に変化し、その影響で閩南方言の白話音も  $m \rightarrow b$  に変化する。その後、非鼻音化現象が起きずにずっと  $m$  を保っていた中原地域からの影響で、長安音もまた  $m$  に戻り、この際  $b$  は  $m$  の勢力に負けて消滅する。一方中原地方の  $m$  は閩南地域に文言音として入ってきた。以後、北方では現代まで  $m$  の音が保たれており、閩南方言においては、長安から入ってきた  $b$  が白話音に、中原から入ってきた  $m$  が文言音にそれぞれ保存されているのである。

#### 1.4 先行研究のまとめと問題提起

これまでの先行研究から、唐代長安音及び日本漢音に関しては一定の結論が出ているようである。よって、日本漢音の非鼻音化が唐代長安音を反映したものである点はほぼ疑いようのないものであると言えるだろう。

対して閩南音に関しては、閩南方言そのものに焦点を当てた研究がほとんどであり、唐代長安音を含む他地域との関係性に言及している研究が少ない。さらに閩南方言と唐代長安音の関係性に言及した数少ない研究である王(1987)と蔣・館野・坂上(2008)は、前者は「閩南音の非鼻音化は長安音の影響である」と述べ、後者は「閩南方言の非鼻音化は唐代長安音の反映で

はなく、独自に変化したもの」と述べており、それぞれ正反対の説を唱えている。また、閩南方言単独の研究に関しても、非鼻音化の過程に対する説がそれぞれの研究によってまちまちである。

よって、ここで改めてそれぞれの説の妥当性を検証し直す必要があると考える。また先行研究の内容が本当に正しいのかどうかについても、自分で調べた資料を基にともう一度確認するべきであろう。よって今後は以下の点について確認・考察する。

1 つ目は、閩南語の鼻音声母字に [h] が本当に存在するのか、また存在する場合は一体どのような字にどのような条件で現れるのか、という点である。閩南語の鼻音声母字に [h] に関しては林 (1998) や蔣・館野・坂上 (2008) らがそれぞれ言及している点が共通しているが、まずは自分でその存在を確認する。

2 つ目は、閩南日母の変化の過程についてである。李 (1992) は、日母が [l] の地域よりも [dz] の地域の方が古いと述べており、それを信じるならば日母は dz→l に変化したと考えられる。一方、小松 (1996) は [l] と [dz] はそれぞれ異なる言語層だと述べている。よって、どちらがより妥当性の高い説なのか考察する。

3 つ目は、閩南語において、鼻音韻尾による声母の現れ方に違いはあるのかという点である。この問題に関しては王 (1987) が一応の規則性があると主張してはいるものの、李 (1992) は閩南語の非鼻音化の条件はよく分からないとしている。よって閩南語の鼻音声母字において、鼻音韻尾による声母の現れ方に規則性があるのかどうかを確認する。

そして最後に四つ目として、閩南方言と長安音の関係性について考察する。先に述べた3点の考察結果を踏まえて、正反対の説が唱えられている閩南方言と唐代長安音の関係性について、一体どちらの説が正しいのか改めて考察する。

## 2. 研究の目的と方法

以下、2.1 から 2.3 にかけて、研究の目的と方法について示す。

### 2.1 研究目的

今回の研究の目的は、大きく分けて2つある。1つ目は「閩南方言における

中古鼻音声母の非鼻音化現象」が一体どのような現象であったのかを明らかにすることである。2つ目は、「閩南方言と唐代長安音に関連性はあるのかどうか」について考察することである。これを中古音，中世音，現代中国の各方言，日本漢字音と比較し，それぞれの音韻的特徴で共通する点，もしくは異なる点を明らかにしていく。

具体的には，上記の漢字音が掲載されている音韻資料を参照し，先行研究で述べられていた説が本当に正しいのかをまず確認する。その上で，先行研究と異なる結果になった場合には，なぜそのような結果になったのかについて考察する。そして，先行研究との比較を通して，閩南方言の非鼻音化は音声学的にどのような現象であったのか，またどのような過程を経て非鼻音化していったのか，非鼻音化が起きたのはいつ頃の時代なのか，の3点について調べる。最後に上記3点についての考察の結果を踏まえて，閩南方言と唐代長安音との関係性について言及する。

## 2.2 研究方法

中古音，中世音，閩南音を含む現代中国の方言音，日本漢字音それぞれを先行研究と比較するために，以下の手順で表を作成した。なお，表を作成する際に参照したそれぞれの資料については次項「2.3 研究資料」で詳しく説明する。

- ①『韻鏡』から鼻音声母字を抽出。
- ②『広韻』で反切を調べる。IPA記号は「漢字古今音資料庫」を参照。
- ③『汉语方音字汇 第二版重排本』で現代中国方言を調べる。
- ④『汉语方音字汇 第二版重排本』に掲載されている字だけを残す。
- ⑤『中原音韻』で中世音を調べる。
- ⑥ 漢字辞典で日本漢字音の呉音と漢音を調べる。

本稿では以上の方法で作成したデータをもとに分析を行い，以下先行研究との比較をしながら論を進めていくこととする。

## 2.3 研究資料

本節では，各資料のそれぞれの内容について説明する。前項 2.2 で表作成に使用した資料は，次ページの通りである。

- ①『宋本廣韻 附韻鏡 七音略』
- ②『宋本廣韻 附韻鏡 七音略』, 「漢字古今音資料庫」(データベース)
- ③『汉语方音字汇 第二版重排本』
- ⑤『中原音韻校本:附 中州楽府音韻類編校本』
- ⑥『全訳漢字海 第三版 机上版』

①と②で使用した『宋本廣韻 附韻鏡 七音略』には、『広韻』と『韻鏡』が掲載されている。『広韻』も『韻鏡』も、どちらも『切韻』(601年成立)の音韻体系を基にしている。『広韻』は1008年に成立した韻書で、成立自体は北宋の時代ではあるが、中身は『切韻』(601年成立)の音韻体系、つまり中古音を反映しているのである。

『韻鏡』は、『切韻』の音韻体系をもとに作られた韻図である。大まかに述べると、横軸を声母23列、縦軸を韻母ごとに16段に分け、この16×23のマス目に対応する音がある場合はその発音の漢字が置かれ、対応する音が存在しない場合は円が書かれている。縦軸は声調ごとに4段に分けられ、さらに韻母の発音によって4等に分けられている。つまり『韻鏡』を縦に見ていくと、その列の声母は全て同じということになる。

また反切のIPA記号を調べるのに使用した「漢字古今音資料庫」は、台湾大学中国文学系と中央研究院の共同開発データベースである。中古音のデータは複数の研究者のものが収録されていたが、今回は王力氏のデータを使用した。

③で使用した『汉语方音字汇 第二版重排本』は、中国各地の方言音をまとめて一覧表にした本である。約3000字の方言音が掲載されており、今回使用した第二版の改訂作業は1980年に開始したとある。

⑤で使用した『中原音韻校本:附 中州楽府音韻類編校本』には、『中原音韻』が収録されている。『中原音韻』は1324年に成立した韻書である。揚子江以北の元・明代の口語の体系が現れているとされ、中世の北方漢字音を知るための貴重な資料となっている。

⑥で日本漢字音を調べる際に利用した辞書は、『全訳漢字海 第三版 机上版』である。この辞書を使用した理由は、仏典音義書や漢音によって仮名が付けられた漢音資料に基づいて呉音と漢音を確定しているからである。本来今回のように音韻資料を調べる際には一次資料にあたるべきであり、辞書を使用するのはふさわしくない。なぜなら、その辞書独自の推定音や慣用音が掲載されている可能性があるからである。しかし今回使用した『漢字海』は、呉音の確定に

『大般若経字抄』、『法華経音義』、『類聚名義抄』等を、漢音の確定に『蒙求』、『孔雀経音義』、『色葉字類抄』等を使用している。そのため、他の辞書に比べて漢字音に信頼が置けると判断した。以上を踏まえた上で、辞書で慣用音とされていた読み方に関しては出典が明らかではないと考えたため、今回はデータに加えない。

### 3. 研究結果と分析

#### 3.1 中国各地域における中古鼻音声母字の現れ方

まずは中国各地域方言における中古鼻音声母字にどのような声母が現れているのか、データから実際に確認できたものから判明した点を以下に挙げる。

- ・明母のグループでは、[b-] が一定数存在するのは廈門と潮州の閩南方言地域だけである。
- ・泥母と娘母のグループでは、大きく分けて [n-] 系の声母と [l-] 声母の 2 種類が存在する。このうち、長沙・双峰・南昌・廈門・潮州では [n-] 系の声母と [l-] 声母の 2 種類が混在しており、一般的に古い時代の特徴を残していると言われる地域の方言で [n-] と [l-] 声母の混同が起きている。
- ・疑母のグループでは、大まかな傾向として、北京をはじめとする北方ではゼロ声母中心であるのが、南下するにつれて [n-] や [ŋ-] が増えていき、廈門・潮州といった閩南方言区では [g-] となっている。
- ・日母のグループでは主にゼロ声母の地域と [n-] 系、[z-] 系、[l-] 系、ゼロ声母のグループに分かれており、北方よりも南方に [n-] 系の声母は多く存在している。また、泥母同様に [n-] と [l-] の混見も見られる。

#### 3.2 閩南方言における中古鼻音声母字の現れ方

つぎに閩南方言における中古鼻音声母字にどのような声母が現れているのか、データから実際に確認できたものを以下の表 8 にまとめる。なお、数が少ないものに関しては括弧に入れて示す。



表 8 閩南方言における鼻音声母

	明母 [m-]	泥母 [n-]	疑母 [ŋ-]	日母 [n̥-]
厦門	m-, b-, (t-), (h-)	n-, l-, (t-)	g-, ŋ-, (h-), (k-), (l-)	l-, n-, (h-)
潮州	m-, b-, (n-)	n-, l-, z-, (h-)	g-, ŋ-, (h-), (k-)	z-, (n-), (l-), (n̥-)

### 3.2.1 [h]

表 8 を見ると、林 (1998) や蔣・館野・坂上 (2008) らが指摘した通り、閩南方言の明母、泥母、疑母、日母全てにおいて [h] がわずかではあるが出現していることが分かる。具体的には以下の字に声母 [h] が見られた。

表 9 閩南方言における [h] 声母を持つ鼻音声母字

	字母	中古音	厦門	潮州	[h] の文 白	呉音	漢音
芽	明	mau	m 文, h 白	m	白話音	ボウ	ボウ
年	泥	nien	l 文, n 白	n 文, h 白	白話音	ネン	ネン
岸	疑	ŋan	g 文, h 白	ŋ 文, h 白	白話音	ガン	ガン
硯	疑	ŋien	g 文, h 白	0 (i)	白話音		ゲン
耳	日	ɽiə	n 文, h 白	z 文, h 白	白話音	ニ	ジ, ジョウ

『広韻』の鼻音声母字の中には [h] 声母が反切異文として出てくる例がある」と指摘していた林 (1998) に則り、表 9 の字について『広韻』で反切を調べたが、これらの字の [h] の発音を示す記述は見当たらなかった。また日本漢字音にも [h] を示すような読み方は存在しなかった。

しかしここでは、閩南方言において [h] が出現しているのが全て白話音である点に注目したい。一般的に白話音は文言音より古いとされ、閩南方言が上古音の特徴を受け継いでいるのは先にも述べた通りである。よって『広韻』に記述の無い閩南白話音にある鼻音声母字の [h] 音は、単純に『広韻』のもとになった『切韻』(601 年成立) よりもさらに古い時代の発音である可能性が高い。そして『広韻』に記載がないということは、鼻音声母字の [h] は、7 世紀頃にはすでに減少傾向にあったのではないかと考えられる。事実、『中原音韻』には [h] は全く現れないため、『広韻』の反切異文の中に残っていた一部の [h] 音も、中世期にはすでに消滅していたと思われる。

よって、7世紀当時すでに減少傾向ないし消滅しかかっていた [h] 音が唐代長安音に存在していなくても不思議ではない。また日本漢字音の呉音や漢音に [h] の痕跡がない点にも、同様の説明ができる。漢音よりも古い呉音は5～6世紀頃の中国漢字音を反映しているとされているが、王（1987）によれば閩南方言の白話音の成立は3世紀頃であり、閩南方言の方が古いため矛盾しない。

つまり、閩南方言の鼻音声母字における [h] 声母は、上古時代に存在した古い発音の名残であると言える。鼻音声母字における [h] 声母は中古期にはすでに減少傾向にあり、中世期に入る前には消滅していたと考えられるため、唐代長安を含めたその他の地域に [h] の痕跡が残っていないとしても不思議ではない。唯一閩南方言だけが、『切韻』体系よりも古い音である [h] を今日まで保存しているのである。

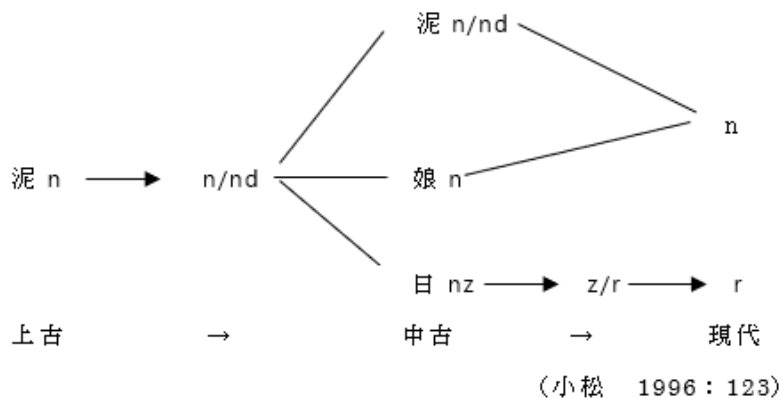
以上のことから、鼻音声母字における [h] 声母から唐代長安音と閩南方言の関係論じるのは難しいのではないだろうか。蔣・館野・坂上（2008）は「閩南方言は唐代長安音の反映ではない」とする根拠の一つとして、鼻音声母が [h] になる現象は唐代長安音には見られない点を挙げていた。しかし筆者は、そもそも鼻音声母が [h] になる現象は上古期には北方にも存在し、それが北方では中古期の早い段階で消滅して、一方閩南地方では消滅せずに現在まで残っているに過ぎないと考える。よって鼻音声母が [h] になる現象は閩南方言独自の変化などではないため「閩南方言は唐代長安音の反映ではない」とする根拠にはなり得ない。

なお現代の双峰では「暖」の字を無声軟口蓋摩擦音 [x] で発音しているが、この字について『広韻』で調べると「況衰切」という反切が存在した。IPA表記に直すと [hiwɛn] となり、声母は曉母 [h] である。双峰は閩地に該当する福建省より少し西にある湖南省の都市であり、双峰方言も古い中国語の特徴を持っていると言われている。例えば「鼻」という字は中古音は [bi] であるが、標準語では [pi] だとなっている。しかし双峰では中古音と同じく [bi] と発音されるように、濁音を現在まで保持している。このように双峰は古い発音を保持している地域であるため、双峰「暖」の [x] も、かつて存在した [h] の名残であると考えられる。

### 3.2.2 [z] と [l]

表9を見ると、閩南方言において泥母と日母で似たような声母が現れていることが分かる。閩南方言が上古音の特徴を今も受け継いでいる点を考慮すると、

これは泥母と日母が元々同じであったという可能性を示していると言える。小松（1996）によれば、普通話における泥母と日母の関係は次ページのようになる。



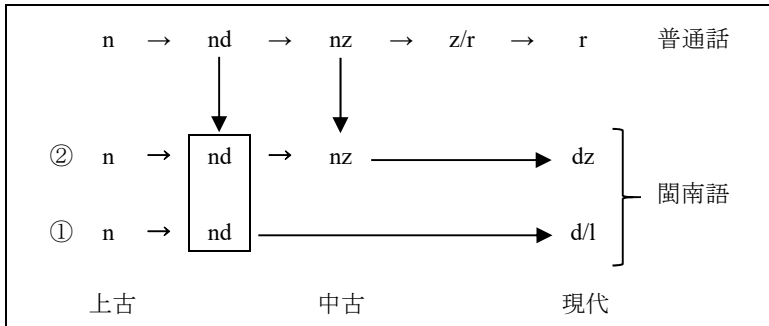
よって上古音の特徴が残る閩南方言では、一部泥母と日母の混同が現代でも起きていると考えられる。では泥母や日母は、一体どうやって最初の *n* から現代の *l* や *z* に変化したのだろうか。

先行研究では閩南日母は *dz* や *l/d* とあったが、今回調査に使用した資料には *dz* ではなく *z* と表記されていた。よって先行研究にあった *dz* も実際はかなり *z* に近い音なのではないかと推測される。これを踏まえて、李(1992)の *n→dz→l* のパターンと、*l* と *dz* はそれぞれ異なる語音層だとする小松(1996)のパターンの両方を検討してみる。

まずは *n→dz→l* のパターンだが、より細かく変化を推測するなら *n→nd→dz→d/l* となろう。一見問題無さそうではあるが、*dz* を *z* として考えると *n→nd→z→d/l* となり、*nd→z* の間に *dz* を入れて *n→nd→dz→z→d/l* としても、最後の *z→d/l* は少し無理があるように感じられる。

では小松(1996)が主張していた2つの語音層で考えるとどうだろうか。先に挙げた図1を、次のページでもう一度確認する。

図1 閩南日母の2つの言語層



(図は筆者が作成)

図1のdzの場所にzを当てはめてみると、閩南語②の語音層はn→nd→nz→zとなり、こちらはz→d/lの変化に比べてごく自然に思われる。

さて、小松(1996)の説では上古音nが非鼻音化してndになった後、中古音nzになる前に中原地方から離れて閩地に入ったとあるが、それを信じるならば、唐代長安で非鼻音化が起こる前に中原地方ですでにn→ndの非鼻音化が起きていたことになる。そこで今回中国各地の方言音を調べたところ、日母に[l]が現れる方言音がいくつか存在することが分かった。具体的には済南、揚州、南昌、梅県、厦門、潮州、福州、建甌の8か所で、以下の図3にその8か所の地図を示す。

図3 日母に[l]が出現する地域



※点が日母に[l]が出現する地域 丸で囲んだ地域が中原地域<sup>10</sup>

(図は筆者が作成)

<sup>10</sup> 中国古代文化の中心で、漢民族発展の根拠となった地域。今日の河南省を中央に東は山東省の西部、西は陝西省の東部にわたる、黄河中下流域の平原をさす。

図3より、中原地方の東から南にかけて日母字に声母 [l] が存在していることが分かる。これは一見、日母の [l] が中原地方の [nd] 由来であるとする小松 (1996) の説を裏付けているように見える。実際にこの点に関して、小松氏は以下のように述べている。

泉州廈門の他にも「日」母は l とする方言が幾つかある。例えば濟南（山東）、揚州（江蘇）、南昌（江西）など。故に、閩南日母の l は孤立したのではなく、あるグループ的变化と考えられる。

（小松 1998 : 121）

さて、小松氏は以上のように述べているが、濟南、揚州、南昌の [l] と閩南方言の日母 [l] ははたして本当にグループ的变化と捉えて良いのだろうか。筆者はそうではないと考える。本来の [l] 声母である来母字の発音を『汉语方音字汇』で調べた結果、武漢と成都では来母がほぼ全ての字において完全に [n] と交代している。例えば武漢と成都では「李」という字を [ni] と発音する。この現象について『汉语方音字汇』では「声母 n 有自由変体 l」（p13, 14）と説明している。つまり中原地域周辺の日母に現れる [l] は単純に [n] との区別が付かなくなっているだけであり、プロセスとしては  $n \rightarrow l$  と直接変化しているのであって、図1で説明していた閩南方言の日母がたどった変化とは異なるのではないかと考える。そもそも、閩南方言の [l] は [d] に近い音であり、[n] との区別が出来ない中原地域周辺の [l] とは音色もかなり異なるのではないかと考えられる。

以上の内容から2.2をまとめると、まず閩南方言の [z] と [l] はそれぞれ異なる語音層である可能性が高いことが分かった。中原地方を中心に中古期以前に  $n \rightarrow nd$  の非鼻音化が起きていた可能性もあるが、現在の中原地方及びその周辺地域に存在する [l] は  $n \rightarrow nd$  の変化を直接反映したものとは考えにくく、よって閩南方言の日母に現れる [l] とは異なるルーツを持つのではないかと考えられる。

### 3.3 鼻音韻尾ごとの比較

#### 3.3.1 閩南方言における鼻音韻尾ごとの声母の現れ方

中古鼻音声母字の閩南方言における非鼻音化の規則・条件は不明であるとする先行研究がある一方で、王 (1987) は鼻音韻尾ごとに声母の現れ方に違いが

あると述べている。そこで次に、作成した表から中古音を鼻音韻尾の種類ごとに分類し、鼻音韻尾ごとに声母の現れ方に違いはあるのかを検証していく。鼻音韻尾ごとに分類し、個数と割合を算出したものを以下の表 10 に示す。

表 10 鼻音韻尾ごとの声母の非鼻音化率

韻尾	声母				
	非鼻音のみ	(非鼻音) 文, (鼻音) 白	(鼻音) 文, (非鼻音) 白	両方あり	鼻音のみ
- n	30 (77%)	9 (23%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
- m	8 (80%)	2 (20%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
- ŋ	16 (62%)	9 (35%)	1 (4%)	0 (0%)	0 (0%)
鼻音韻尾以外	83 (69%)	4 (3%)	15 (13%)	8 (7%)	10 (8%)

表 10 より、全体的に非鼻音化した声母が圧倒的優勢ではあるものの、全体的に非鼻音化している字とそうでない字が文読音、白話音ともに混ざりあっており、王 (1987) が述べているような綺麗な分類にはならないことが分かった。ここで興味深いのは、白話音に鼻音声母が現れる割合が、陰韻のときに比べて高いことである。白話音の方が古い発音である点から考えると、これはやはり鼻音韻尾の影響で声母が非鼻音化せずに鼻音が保たれているのだろう。逆に鼻音韻尾を持たない陰韻字はその分非鼻音化が進みやすかったため、鼻音声母よりも非鼻音声母の方が白話音に現れる割合が高くなっていると考えられる。

### 3.3.2 日本漢字音の「頭音交替の法則」

さて、先ほどデータから抽出した鼻音韻尾字の日本漢字音を調べてみると、実に半分以上がバ行、ダ行、ザ行であった。「頭音交替の法則」が当てはまるのは実は一部の字なのである。さらに呉音は本来マ行、ナ行で音訳されているはずだが、一部の字は呉音でも非鼻音化が起こっている。次のページの表 11 に呉音で非鼻音化している字を示す。

表 11 呉音で非鼻音化している日本漢字音

	中古音	呉音	漢音
芽	mau	ボウ	ボウ
耐	nbi	ダイ, ノウ	タイ, ドウ
讓	ʃian	ジョウ	ジョウ
染	ʃiem	ゼン	ゼン

一部の字が呉音でも非鼻音化しているこの現象は、日本漢字音が中国本土の漢字音から離れて独自の変化をしていったことの現れだと言えるだろう。日本と中国ではそもそも日本語と中国語という違いがあり、使用される環境が異なれば、日本独自の音韻的な変化が起きたとしてもなんら不思議はない。

以上の点から、蔣・館野・坂上（2008）が述べるように、閩南方言は「頭音交替の法則」に当てはまらないため唐代長安音とは無関係である、とは言いきれないだろう。唐代長安音を反映した日本漢音が原音から離れて独自の変化を遂げている以上、閩南方言もそれと同じように独自の変化をしていった可能性は捨てきれない。

### 3.4 「閩南方言の非鼻音化は7世紀以前」説への反論

さて蔣・館野・坂上（2008）が、閩南方言と唐代長安音は無関係だとする根拠の一つに挙げていた李（1992）の「閩南方言の非鼻音化は7世紀以前」説であるが、この論は成り立たないと筆者は考える。ここで先に紹介した李（1992）該当箇所を、ここでもう一度日本語訳で確認する。

董昭輝氏は、日本語の中には多くの漢語からの借字があると指摘している。例えば、美、質、女、努、疑、義などで、これらは全てすでに非鼻音化していて、しかし日本語音韻変化史上においてそれまで非鼻音化の変化は決して起こっていない、よって本来の漢語は日本語に借入された時にはすでに非鼻音化していたはずだ。そのため、董氏は閩南語のこれらの音の非鼻音化も固有のものであり変化の結果ではない可能性が高いとしている。作者はむしろこの非鼻音化の時代は相当早く、日本語が大量に漢語を借入した（およそ七世紀から九世紀）時期より前だということを示しているに過ぎないと考える。

（李 1992 : 433）

この論にはいくつか事実と異なる点が存在すると筆者は考える。まず「日本語音韻変化史上においてそれまで非鼻音化の変化は決して起こっていない」という点だが、先ほど確認したように日本呉音の段階で一部非鼻音化が起きているため、正しくない。さらに李氏は、日本漢字音が全て非鼻音化しているのは、もともとなった中国漢字音が非鼻音化しているからであり、よって日本語が大量に漢語を借入した7世紀～9世紀よりも前に日本漢字音のもともとなった閩南語は非鼻音化しているはずだという内容を述べているのであろうが、これまで散々確認してきた通り、日本漢音の非鼻音化現象は唐代長安音を反映したものである。つまり日本漢音と閩南方言を直接結びつけて論じている点がそもそも適切ではなく、李氏のこの論は成立しないのである。

よって、蔣・館野・坂上（2008）がこの論の7世紀の部分にのみ着目し、それを根拠に閩南方言と唐代長安音の非鼻音化の時期が異なると主張するのは、いささか無理があると考えられる。

### 3.5 閩南方言の非鼻音化現象と唐代長安音の関係

これまで検証してきた内容をまとめると、閩南方言の非鼻音化は唐代長安音の反映ではないとしていた蔣・館野・坂上（2008）の論には、いくつか不合理な点が見受けられることが分かった。唐代長安音と日本漢音に存在しない閩南方言鼻音声母字の [h] は、上古期から中古期にかけて減少、衰退していった発音を閩南方言が保存しているからであり、閩南日方言の母 [l] や [z] は、中原地域が由来である可能性が高いことが分かった。また唐代長安音を反映しているとされる日本漢字音においても、唐代長安音とは異なる非鼻音化現象が独自に発達しており、閩南方言だけが現象面で一致しないとは言いきれない。さらに、日母に関して中古期以前に非鼻音化が起きていた可能性があるにせよ、それは閩南地方に限った話ではなく、それ以外の声母に関しては閩南方言の非鼻音化が7世紀以前に起きたとする根拠は存在しない。

以上の点から、筆者は閩南方言の中古鼻音声母字の非鼻音化は、唐代長安で起こった非鼻音化を反映したものであると考える。特に日母が中原由来のものである可能性が高いことから、他の声母も同じく北方からの影響を受けたであろうことは十分に考えられるはずである。よって筆者は、中原地方からの影響に言及している王（1987）の説を支持する。また当時の長安は高度な文明を誇る都市であり、周囲の地域が影響を受けたのは当然である。日本が遣唐使を派遣していたのと同じように、当時の閩地が都と交流し、文化を吸収しようとし



ていたとしても不思議ではない。その後、日本語と閩南方言はそれぞれ独自に変化していき、閩南方言では非鼻音化をより加速させる方向に発展したと言える。

また王（1987）の説に基づくならば、現代の北方語をベースとした普通話の中古鼻音声母字が非鼻音化していないことにも説明がつく。以上の点も、王氏の説を支持するに足ると筆者が判断した理由の一つである。

#### 4. おわりに

今回の研究により、中古鼻音声母字の非鼻音化現象について、以下の点が明らかとなった。

- ・ 閩南方言の中古鼻音声母字における [h] 声母は、上古期に存在し、中古期の北方では衰退していた古い発音の名残であると考えられる。
- ・ 日母 [l] と [z] は異なる時代にそれぞれ中原地域から影響を受けたものである可能性がある。
- ・ 閩南方言の中古鼻音声母字の非鼻音化は文白両方で複雑に出現し、明確な規則や条件は不明である。しかし、鼻音韻尾を持つ字の方が白話音においては鼻音声母を維持しやすい。
- ・ 日本漢字音においても、非鼻音化に関して母胎の唐代長安音とは異なる独自の変化が見られた。
- ・ 閩南方言の中古鼻音声母字における非鼻音化現象は、唐代長安で起きた非鼻音化現象に影響を受けた後、閩南語内で独自に発展、変化したものである可能性がある。

このように、本稿では最終的に「閩南方言の中古鼻音声母字における非鼻音化現象は、唐代長安で起きた非鼻音化現象を反映したものである可能性がある」という結論に至ったが、これはあくまで「無関係であると断言するよりは可能性が高い」というだけの話であり、唐代長安音と閩南方言を直接結びつけるデータは得られていない点に注意したい。しかし本稿では、閩南方言に関するそれぞれの言説に対して検証をし直し、そこに閩南地方以外の方言音のデータを加えることで、各先行研究に新たな意見を付与することができた点は非常に有意義に感じている。

本稿では非鼻音化現象というものに焦点を当てて論を進めてきたが、同じ漢字圏でも日本語、中国北方語と南方語でそれぞれ異なる特徴を有しているのは、実に興味深い。また言葉は常に変化するものであり、遠い過去の言語について考察するのは非常に難しいのもまた事実である。しかし一見失われてしまったかに見えた言葉の手がかりが、海を挟んだ異国の言語に残されている可能性がある。これが、今回の研究を通して学んだ漢字研究の面白みであると筆者は感じている。

## 参考文献

- 有坂秀世（1940）「メイ（明）ネイ（寧）の類は果して漢音ならざるか」『音声学協会会報』（64），369-374 初出、『国語音韻史の研究 増補新版』1957年，三省堂再録
- 北京大学中国語言文学系語言学教研室編 王福堂 修訂（2003）『汉语方音字汇 第二版重排本』語文出版社
- 蔣垂東・館野由香里・坂上智一（2008）「日本漢音と閩南方言--中古鼻音声母の非鼻音化を中心に」『言語と文化』（20），44-69，文教大学
- 小松嵐（1996）「南語における『日』母の語音層 - 日本漢字音との対照 - 」『藝文研究』（71），135-118，慶應義塾大学藝文学会
- 李壬癸（1992）「閩南語的鼻音問題」『中央研究院歷史語言研究所會議論文集之二，中国鏡内語言暨語言学第一輯漢語方言』，423-435，中央研究院歷史語言研究所
- 林宝卿（1998）「閩南方言声母白讀的歷史語音層次初探」『古漢語研究』1998年第1期，60-30
- 羅常培（1933）『唐五代西北方音』『国立中央研究院歷史語言研究所单刊甲種之十二』 初出，2011年，商務印書館再録
- 水谷真成（1957）「唐代における中国語語頭鼻音の Denasalization 進行過程」『東洋学報』，39（4），1-31
- 沼本克明（1986）『日本漢字音の歴史』東京堂出版
- S.R.ラムゼイ著 高田時雄他訳（1990）『中国の諸方言 歴史と現況』大修館書店
- 戸川芳郎監修，佐藤進・濱口富士雄編（2011）『全訳漢字海 第三版』三省堂
- 藤堂明保・相原茂（1985）『新訂中国語概論』大修館書店

王育徳（1987）『台湾語音の歴史的的研究』第一書房  
呉葆勤 編（2008）『宋本廣韻 附韻鏡 七音略』江蘇教育出版社  
張玉來・耿軍 校（2013）『中原音韻校本:附 中州樂府音韻類編校本』中華書

#### web 資料

「漢字古今音資料庫」台湾大学中国文学系 中央研究院

<http://xiaoxue.iis.sinica.edu.tw/ccr/#> （最終アクセス日：2017/10/7）

付記：本稿は、静岡大学卒業論文「鼻音声母の非鼻音化から見る唐代長安音と閩南方言の関係」（2018年1月提出）を一部改稿したものである。